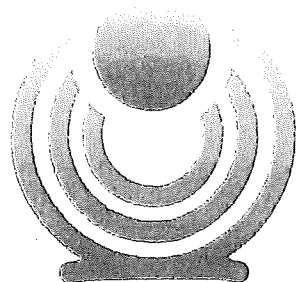


第 37 回

愛知県高等学校保健体育研究大会

研 究 集 録



期日 令和 4 年 1 月 14 日 (金)

会場 名古屋市公会堂 4 階ホール

主 催 愛知県学校体育研究連合会高等学校部会

共 催 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会

愛知県私学協会



目 次

- 1 巻頭言……………P 1
「新学習指導要領の円滑なスタートに向けて」
－「見方・考え方」を育てる学習過程の工夫－
愛知県学校体育研究連合会高等学校部会 会長 丸山 洋生
- 2 第 37 回愛知県高等学校保健体育研究大会開催要項……………P 2
- 3 研究発表……………P 3
 - (1) 「相互評価活動がもたらす体育授業改善」……………P 3
－指導と評価の一体化を目指して－
愛知県立愛知総合工科高等学校 教諭 佐藤 将之
 - (2) 「病弱特別支援学校における保健体育の授業について」……………P15
愛知県立大府特別支援学校 教諭 早川 祥平
 - (3) 「持久走におけるモチベーションと体力向上」……………P29
桜丘高等学校 教諭 三浦 領大
- 4 講演……………P41
「目指すところを社会と共有する『心の健康に関する教育』の充実」
－新学習指導要領が求める高等学校科目保健の授業像－
講師 東京都立松沢病院 院長 水野 雅文 先生
- 5 愛知県学校体育研究連合会高等学校部会のあゆみ（資料編）……………P45
 - (1) 愛知県高等学校保健体育研究大会……………P47
 - (2) 全国学校体育研究優良校・全国学校体育研究功労者……………P56
 - (3) 愛知県学校体育優良校・愛知県学校体育功労者……………P59
 - (4) 歴代会長……………P62

新学習指導要領の円滑なスタートに向けて

－「見方・考え方」を育てる学習過程の工夫－

愛知県学校体育研究連合会

高等学校部会 会長 丸山 洋生

百年に一度のパンデミックが足かけ三年に及ぶ中、教育現場は「学校の新しい生活様式」に沿って学習活動を工夫し、学びを止めない地道な努力を続けています。特に制約の多い体育・健康に関する指導場面において、「密集する運動」「近距離で組み合ったり接触したりする運動」「長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等」を避け、個人や特定の少人数での活動を組み立てたり、外部人材を活用した保健指導をリモートで実施したりするなど、児童生徒の安全・安心に向けて払われる様々な努力に対し、深甚なる敬意を表します。

さて、新学習指導要領の高等学校における実施を今春に控えて、各校では鋭意準備が進められていることと拝察いたします。御存知のとおり、今次改訂の基本方針の一つである「主体的・対話的で深い学び」の実現には、児童生徒が「見方・考え方」を自在に働かせて、教科に関する事象を自分と関連付けて捉えることが重要であり、その教科ならではの「見方・考え方」を育てることが、教師が専門性を発揮すべき「深い学びの鍵」として期待されています。

「体育の見方・考え方」は、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」と示されています。例えば「体力を高める運動」が「実生活に生かす運動の計画」として新たに示されたことを踏まえ、体力に関するねらいを設定し、自己の健康や体力の実態と実生活に応じて、科学的な知識を活用した運動の計画を立てて取り組んだり、スポーツボランティアへの関心の高まりなど、Tokyo2020のレガシーを生かして運動やスポーツとの「多様な関わり方」への理解を深めたりすることなどについて、改訂の趣旨を踏まえた学習過程・指導方法の工夫が期待されます。

「保健の見方・考え方」は、「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること」と示されています。例えば現代的な健康課題である感染症が「現代の感染症とその予防」として充実されたことを踏まえ、生活上の課題やウイルスの情報を感染防止の原則から捉え、選択すべき行動や社会的対策への協力の仕方を考えることに取り組んだり、「精神の健康」が「精神疾患の予防と回復」として新たに示されたことを踏まえ、心身の不調の早期発見、治療や支援の早期開始によって回復可能性が高まることへの理解を深めたりすることなどについて、改訂の趣旨を踏まえた学習過程・指導方法の工夫が期待されます。

本日御講演いただく東京都立松沢病院院長 水野雅文先生は、東邦大学医学部で長年にわたり精神疾患を研究され、高等学校学習指導要領解説保健体育編の専門的作業等協力者としても我が国の体育・健康に関する教育の充実に御尽力をいただく斯界の権威であり、示唆に富んだ御教示を本県の財産として是非共有いたしたく存じます。

結びに、研究委嘱校の成果と課題、研究機関や医療機関が有する最新の知見、そして何よりも授業改善への刺激と熱い意欲を各校へお持ち帰りいただくことにより、本県における体育・健康に関する教育のますますの発展と、参会の皆様の一層の活躍を御期待申し上げ、巻頭言いたします。

第 37 回愛知県高等学校保健体育研究大会開催要項

1 趣旨

保健体育行政・研究機関の最新の動向や知見に触れるとともに、委嘱校の研究成果を共有し、生徒が生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続するために必要な保健体育及び学校保健の指導力向上に資する。

2 主催

愛知県学校体育研究連合会高等学校部会

3 共催

愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 愛知県私学協会

4 日時

令和 4 年 1 月 14 日（金） 13 時 15 分から 16 時 30 分まで

5 会場

名古屋市公会堂 4 階ホール（名古屋市昭和区鶴舞 1 丁目 1 番 3 号） 電話 052-731-7191

6 日程

(1) 開会のことば

(2) 会長挨拶 愛知県学校体育研究連合会高等学校部会 会長 丸山 洋生

(3) 来賓挨拶

(4) 来賓紹介

(5) 表彰（13:25～13:35）

令和 3 年度全国表彰伝達及び愛知県表彰

ア 全国学校体育研究優良校

愛知県立大府高等学校

イ 全国学校体育研究功労者

丸山 洋生（本会会長 愛知県立瀬戸高等学校校長）

ウ 愛知県学校体育優良校

愛知県立尾北高等学校、愛知県立刈谷東高等学校

エ 愛知県学校体育功労者

大谷 一司（本会前副会長 愛知県立瀬戸西高等学校教諭）

内田 啓介（本会前理事 愛知県立惟信高等学校教諭）

(6) 研究発表（13:45～14:45）

ア 「相互評価活動がもたらす体育授業改善」－指導と評価の一体化を目指して－

愛知県立愛知総合工科高等学校教諭 佐藤 将之

イ 「病弱特別支援学校における保健体育の授業について」

愛知県立大府特別支援学校教諭 早川 祥平

ウ 「持久走におけるモチベーションと体力向上」

桜丘高等学校教諭 三浦 領大

(7) 講演（14:55～16:25）

演題 「目指すところを社会と共有する『心の健康に関する教育』の充実」

－新学習指導要領が求める高等学校科目保健の授業像－

講師 東京都立松沢病院院長 水野 雅文 先生

(8) 閉会のことば

研究発表 (1)

相互評価活動がもたらす体育授業改善
－指導と評価の一体化を目指して－

愛知県立愛知総合工科高等学校

相互評価活動がもたらす体育授業改善 —指導と評価の一体化を目指して—

愛知県立愛知総合工科高等学校

矢倉 弘恵 石原 照三

河村 修一 佐藤 将之

濱田 高幸 丸山 智枝

1 はじめに

本校は、平成 28 年(2016 年)に、ものづくり王国愛知の次世代を担い、産業界のリーダーとなる人材を育成することを目標に、愛知県立愛知工業高等学校と愛知県立東山工業高等学校を統合し開校した、創立 6 年目の新設校である。全日制 3 年課程である本科（機械加工科、機械制御科、電気科、電子情報科、応用化学科、建設科、デザイン工学科の 5 系列 7 学科）と、高等学校卒業者を対象とした全日制 2 年課程の専攻科が設置されている。また、本科に在籍する生徒の半数近くが上級学校への進学を希望していることもあり、今年度からは応用化学科等を学科改編し、主に理工系大学への進学を念頭に置いたカリキュラムを編成している理工科という学科が新設された。

本校の教育目標は、「① 総合工科の特色を生かし、自らの専門分野を基幹として幅広い知識、技術・技能を学び、総合的なものづくりの実践力を育成する」「② 産業界と連携した実践的な学びを通じて、課題発見力、課題解決力及び自ら学び自らを律する能力を育成する」「③ グローバル社会に対応する多様な価値観を理解しようとする態度と優れたコミュニケーション能力を育成する」の 3 点の柱を具現化するべく、今やるべきことを自ら考え、創意工夫をしながら最善のプロセスを用い努力することで教育活動全般を活性化するように努めている。

部活動は盛んで、これまでに弓道部が全国大会、陸上競技部が東海大会に出場、バレーボール部など多くの運動部が県大会に出場している。また、各学科の技術部等で技術・技能を磨く生徒たちが、中央職業能力開発協会が主催する若年者ものづくり競技大会や技能五輪などにも選手として多数出場を果たしている。



図 1 本校正門からの校舎

2 主題設定と本研究のねらい

新学習指導要領が平成 30 年に告示され、令和 4 年度から年次進行で実施される。

新学習指導要領解説の総則編においても、「カリキュラム・マネジメントの充実のためには、教育課程の編成のみならず、実施、評価、改善の過程を通じて教育活動を充実していくことが重要である。」とされ、さらには「教育課程の実施及び学習評価について独立して項目立てを行い、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善及び学習評価の充実について規定している。」とある。

また、国立教育政策研究所教育課程研究センターが作成した『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』では、「学習指導」と「学習評価」が学校教育活動の根幹に当たり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っているとされている。

本校では指導と評価の一体化を図るべく、評価の改善に目を向け、生徒の学習改善、教師の授業改善が両輪となるように体育授業の進め方と評価方法を研究していくことで、本校科目「体育」の質の向上を目標に研究を進めた。

3 研究仮説

各選択授業の導入段階において、生徒同士が相互に技能を評価する活動を取り入れることとした。相互に技能の評価を行うことで、以下の三つのことが期待されると仮説を立てた。

- (1) 生徒が他者の評価を行うことは、責任をもって他者の技能を見ることになる。自らが各種目の技能を身に付ける上で、ポイントを理解することなく他者の評価はできないと思われる。さらには生徒自身が自然に技能を身に付け、ポイントについて理解が深まることも期待される。他者の評価をするために知識を身に付けるということが、自身の技能を向上させることへつながることを期待した（「知る」、「わかる」⇒「できる」）。
- (2) 評価を受けた生徒は、他者からの評価を目にすることで自身の技能について課題の把握ができ、その後の学習改善に役立てられるのではないかと考えた（「思考力、判断力、学びに向かう力等」）と考えた。
- (3) 生徒同士の相互評価シート（図 2）を教師が確認することで、生徒のつまづきに気付くことができ、生徒の実態に応じて授業計画を修正していくことが可能となるのではないかと考えた（授業改善）と考えた。

4 研究期間及び対象クラス

令和 2 年度 1 年生体育授業（バドミントン）及び令和 3 年度 1 年生体育授業（バドミントン）において実施した。

5 研究概要

- (1) 単元計画の導入段階では、基礎的な技術を練習させた後に、相互評価シート（図2）を使用して評価活動を実施した。その際、評価者によってばらつきが出ないように、「評価のポイント」の表現方法を可能な限りシンプルなものにするよう心がけた。

愛知総合工科高校 1年生体育 相互評価シート【バドミントン】

●クリア（球出しはコート中央よりやや奥へロブを打つ）

成否（○or×を記入）					評価
1	2	3	4	5	
評価のポイント（チェック3つでA、2つでB、1つでC、0でD）					
①	頭より高い位置でシャトルをとらえている。				
②	半身の状態から身体の回転を利用して打つことができています。				
③	3本以上、バックバウンダリーラインから1m以内に高い軌道から落とせた。				

●ドロップ（球出しはコート中央よりやや奥へロブを打つ）

成否（○or×を記入）					評価
1	2	3	4	5	
評価のポイント（チェック3つでA、2つでB、1つでC、0でD）					
①	頭より高い位置でシャトルをとらえている。				
②	半身の状態から身体の回転を利用して打つことができています。				
③	3本以上、ショートサービスラインより手前に低い軌道から落とせた。				

●ロブ（球出しはショートサービスライン手前にシャトルを左右交互に投げ入れる）

成否（○or×を記入）					評価
1	2	3	4	5	
評価のポイント（チェック3つでA、2つでB、1つでC、0でD）					
①	足を大きく前へ踏み出し、ラケットを肩のあたりまで振り上げている。				
②	フォアハンドでもバックハンドでも高い軌道で打てる（コート中央の球出しが触れない高さ）。				
③	3本以上、バックバウンダリーラインから1m以内に高い軌道から落とせた。				

●ヘアピン

成否（○or×を記入）					評価
1	2	3	4	5	
評価のポイント（チェック3つでA、2つでB、1つでC、0でD）					
①	足を踏み出し、目線の高さでシャトルをとらえている。				
②	フォアハンドでもバックハンドでも低い軌道で打てる（ネット～身長程度の高さ）。				
③	3本以上、ショートサービスラインより手前に低い軌道から落とせた。				

1年（ ）組（ ）番 氏 名（ ）

図2 相互評価シート（バドミントン）

- (2) 相互評価で得られた他者からの評価をもとに、自身の苦手な技能を克服したり得意な技能を生かしたりするための個人技能の練習方法や試合での戦術についての組立て等を考えさせ、「考察用シート」(図3)に記入させた。

愛知総合工科高校 1年生体育 考察用シート【バドミントン】

●相互評価の結果、自分が苦手だと考えられるフライトを書き出そう

●苦手を克服するために、どのような練習をしたら良いか、考えよう

●相互評価の結果、自分が得意だと考えられるフライトを書こう

●得意なことを生かすためには、どのようにゲームを戦えば良いか、戦略を立ててみよう

1年()組()番 氏 名()

図3 考察用シート (バドミントン)

(1)相互評価活動は、あなたの技能の向上に役立ったと思いますか？

183 件の回答

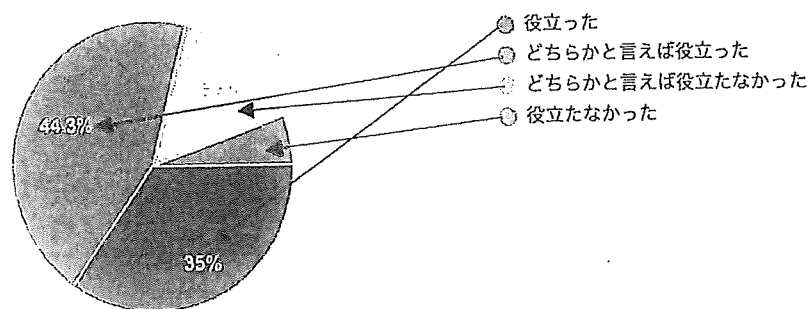


図5 技能の向上についての集計結果

他者を評価するためには技能のポイントに着目して他者の技能を見ることとなり、相互評価活動は技能についての理解を深めることにつながったと考えられる。そこから自身がプレーする際の意識も高まり、技能向上へつながったと考えられる。

このことから、相互評価活動は生徒の「知識及び技能」の習得に少なからず貢献する活動であると考えられる。しかし一方で、生徒によって評価の結果にばらつきが出ないよう、評価のポイントを極力わかりやすく簡潔にまとめる必要があるという点で注意が必要である。また簡潔にしすぎるあまり、それが技能向上のためのポイントでなくなってしまうよう、領域や型によって評価のポイントを精査する必要がある。

例えば、相手コートにボールを打ち返すネット型の球技では、空間をつくり出すための技術の評価する際に、コート上のどこにボールが落ちたかなどに着目させることで、そこには目安となるラインが存在し評価がしやすい。しかし、攻防入り乱れるゴール型の球技では、相手チームや自チームの状況に応じてプレーを選択していくのがゲームの様相であり、客観化が難しい部分が多く存在する。プレーする人数を減らしたり、ボールやゴールの位置を基準として動き方をシンプルに分解したりするなど、空間の捉え方をわかりやすくする工夫が必要であると考えている。

(2) あなたの技能の課題把握に役立ったと思いますか (図6)。

各項目の有用性を示す上位2項目の合計は、(1)の回答から更に増えて83.1%に上り、8割以上の生徒が、相互評価活動はバドミントンの技能の課題把握に役立ったと回答している。

(2)相互評価活動は、あなたの技能の課題把握に役立ったと思いますか？

183 件の回答

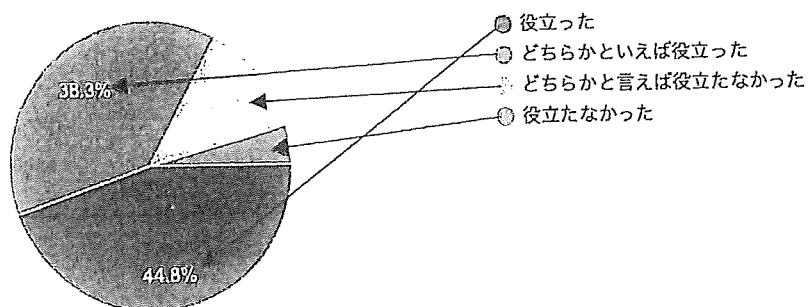


図6 課題の把握についての集計結果

相互評価活動が生徒自身の課題の把握には非常に有効な手段であることがうかがえる。(1)の回答は、自分が他者を評価することには責任が伴い難しさを感じる生徒がいる一方で、他者から評価された結果を確認し、自分自身の欠点や課題を受け入れることは素直に感じていることを示している。また、この結果を受けて次にどう行動するかが、「思考力」の育成へとつながっていくと考える。

さらには、教師が1対多数の授業展開であると、こまめに評価をフィードバックしていくことが困難な場面も多いため、教師にとっても非常に有効な手段であると言える。

(3) 課題克服のための練習方法を考えることができましたか (図7)。

各項目の有用性を示す上位2項目の合計は72.2%であり、7割程度の生徒が、相互評価活動の後に、バドミントンの技能の課題克服のための練習方法を考えることができたと言っている。

(3)相互評価活動の後、課題克服のための練習方法を考えることができましたか？

183 件の回答

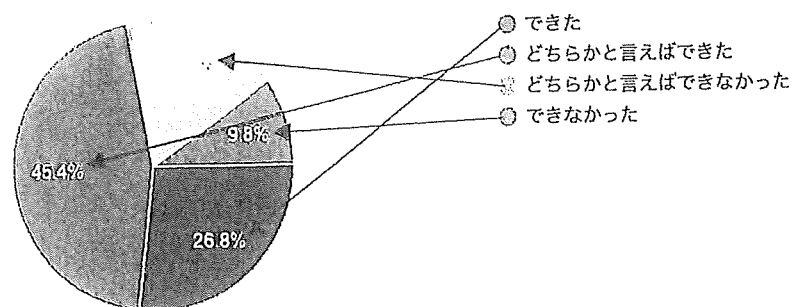


図7 課題克服のための練習法を考えることができたか

有効性は示しているものの、他の質問項目に比べて若干効果が低い傾向が見られる。これは、自分のできないことや苦手なことが理解できてもその克服のための手段がわからなかったり、考えられなかったりする生徒が多いことを示唆している。実際に人とコミュニケーションを取ることが苦手な生徒が二の足を踏み、積極的に課題解決の取組ができなかった例も自由記述の回答から見てとれた。

これらのことから、単元計画の中盤において、生徒の「思考力、判断力、表現力等」の育成につながるようなアドバイスや、積極的に行動できない生徒へのグルーピングのアシストなど、生徒が「学びに向かう」サポートをすることが教師の重要な役割であり、それが授業改善へとつながるものと考えられる。

(4) 長所を生かすための戦術について考えることができましたか (図8)。

各項目の有用性を示す上位2項目の合計は78.1%であり、8割弱の生徒が、相互評価活動の後に、バドミントンの技能において長所を生かすための戦術について考えることができたとは回答している。

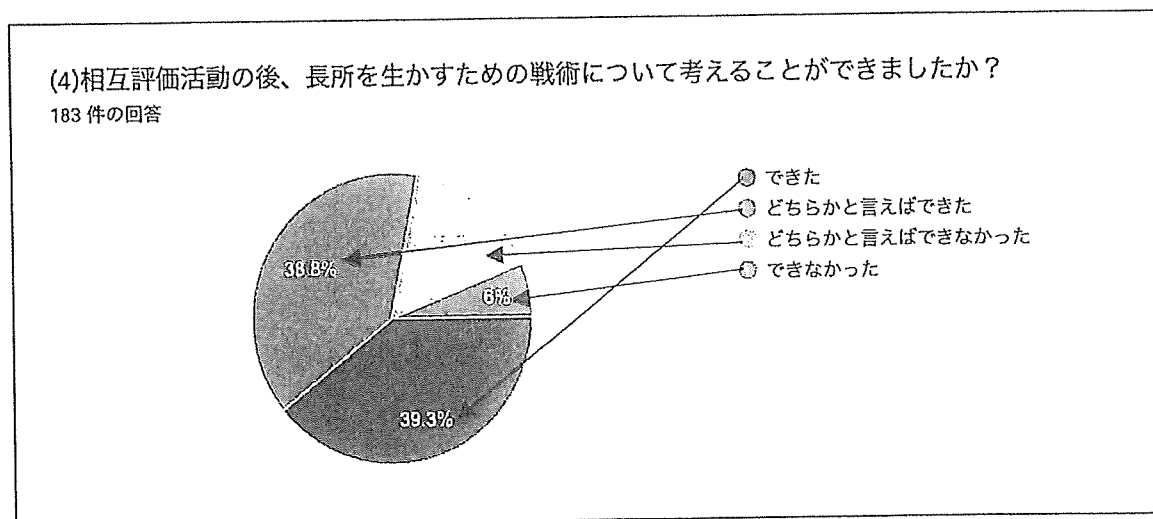


図8 戦術について考えることができたかの集計結果

アンケート結果が前項(3)と比較すると有用性が高く出たことは、本校の生徒はできない技能を克服するための練習方法を考えるより、できていることを効果的に生かす方策を考えることが容易であると考えた生徒が多かったと思われる。ここからも教員の授業改善としてさらに生徒の「思考力、判断力、表現力等」を育成していくことができるのではないと思われる。

7 まとめ

今回の研究では、実施後のアンケート結果等から見て、相互評価活動の効果がおよそ確認できたと考えている。

本校の科目「体育」での授業は、生徒の自主性に任せ、厳しい人数制限を設けない

種目選択を実施しているため、結果として一人の教員が 40 名以上の生徒を受け持つことも少なくない。よって限られた授業時間数の中で、一人一人の生徒へ教員からの評価の結果をフィードバックできる機会は限界があると感じていた。そこで、今回研究した生徒相互に評価をさせるという相互評価活動は非常に有効であったと感じている。今後も指導と評価の一体化を図るとともに、PDCA サイクルを回しながら生徒の学習改善と教員の授業改善につながる相互評価活動を積極的に取り入れていきたい。

また、今回はコロナ禍での研究であったため、ソーシャルディスタンス確保の観点からネット型球技のみの研究となったが、科目「体育」での他の領域や型の授業においても有用な授業の展開方法を考えていく必要がある。来年度から新学習指導要領に準拠した教育課程が年次進行で実施されるが、生徒がより主体的・対話的で深い学びを進めていくための授業改善と評価の工夫について、今後も更なる研究を続けていきたい。

研究発表（2）

病弱特別支援学校における保健体育の
授業について

愛知県立大府特別支援学校